

「イエス・キリスト」とは、「イエスはキリスト（救い主）である」という信仰告白の言葉です。「イエス」と「キリスト」はワンセットであることが当たり前のようになっていますが、「イエス」と「キリスト」の間には、簡単にワンセットにできない隔たりがあったことをマルコ福音書（8:27～33）は示しています。イエスから「あなたがたは、私を何者だと言うのか」と問われた弟子のペトロは「あなたは、メシア（ギリシア語ではキリスト）です」と答えます。しかしイエスは、その信仰告白を公言しないようにと戒めるのでした。ペトロの思い描くキリスト像と、イエスが実際にキリストとして辿っていく道のりの間には、大きな隔たりがあったことが示されます。そして、イエスが十字架で処刑される出来事を受けてもなお、イエスをキリストと呼べるのかが、弟子たちに問われます。

本日の箇所には、イエスがヨハネから洗礼を受ける場面が記されていました。ヨハネが授けていた洗礼は罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼でした。イエスは、「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました（フィリピ2:6-7）」…洗礼を受けていた多くの人々と同じ所に身を沈め、罪の赦しを必要とする人々に結びついてくださった、ここに、イエスがキリストである所以があるのだと聖書は示しているように思います。

イエスが洗礼を受けた時、「天が裂けて、“霊”が鳩のように」くだってきたとあります。この天が「裂ける」という言葉は、イエスが十字架で息を引き取られた後に、神殿の垂れ幕が真っ二つに「裂ける」（15:38）という言葉と全く同じものが使われています。それは、天と地との隔てが裂けたことを意味します。天と地（人間）を隔てているものは、人間の罪とされていますが（イザヤ書59:1-2）、その隔たりが、神の側から裂かれたとするのです。罪（的外れな生き方の意）の中にある人間を、愛する独り子イエスを捧げてでも、ご自分の元に取り戻そうとする神の姿が、この洗礼の場面に言い表されているように感じます。

イエスがキリストであることの実感が遠ざかってしまうことがあるかもしれません。しかし、私達がいつでも、どんな人生の場面でも、「イエスをキリスト」と心から告白できるように、神の側から既にその隔たりを埋めてくださっています。十字架の死に至るまで、私達に歩み寄る生き方に従順であられたイエスの招きと赦しの意味がそこにあります。「本当にこの人は神の子だった」と新たに告白できるその日まで、主に従い行く歩みを積み重ねて参りたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

